

松江市文化財調査報告書第52集



出雲国造館跡発掘調査報告書

1993年3月

松江市教育委員会

3
B
051



「出雲国造館跡」遠景（南東から）



第1調査区 SD-01

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である **軒** 、すなわち **昇** と **冒** の組み合わせによつて全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

出雲国造館跡発掘調査報告書

1. 本書は、平成4年度において松江市教育委員会が実施した「出雲国造館跡発掘調査」にかかる発掘調査報告書である。
2. 本書は、松江市教育委員会が国庫補助金を受けて実施したものである。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

主体者	松江市教育委員会	教育長	諫訪秀富
事務局		生涯学習部長	松尾光浩
		文化課長	中西宏次
		文化財係長	岡崎雄二郎
調査担当者及び調査員		同主事	中尾秀信
		同嘱託員	富田茂雄

4. 調査の実施にあたっては、次の方々の協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

土地所有者 松江市新雜賀町6-7 竹下勇（大庭町字土居299-3）
松江市大庭町378 廣江東洋男（〃 295-2, 295-10）

5. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。
6. 本書の編集及び執筆、図面の浄書等は中尾が行った。



目 次

1. 調査に至る経緯.....	3
2. 位置と歴史的環境.....	3
3. 発掘調査の概要.....	6
(1) 昭和54年度の調査.....	6
(2) 昭和55年度の調査.....	6
(3) 昭和56年度の調査.....	6
(4) 平成4年度の調査.....	8
4. 出土遺物の概要.....	14
5. 小 結.....	21

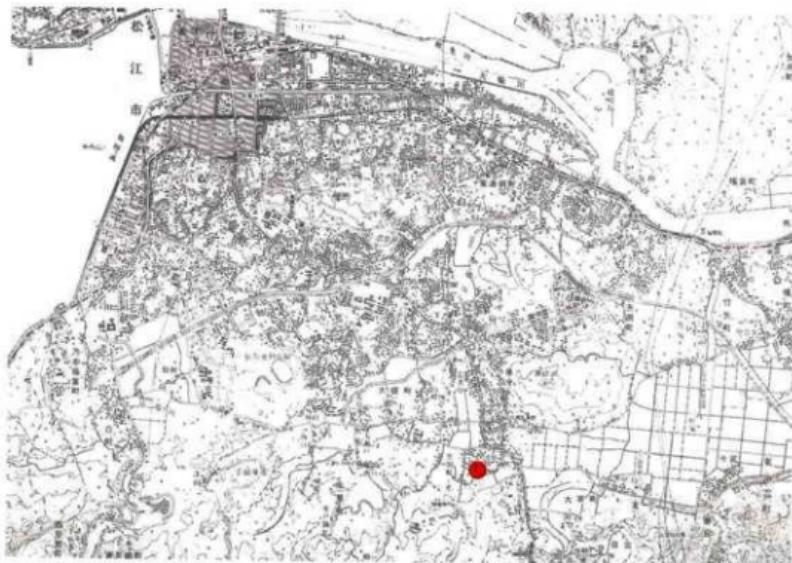
1. 調査に至る経緯

松江市教育委員会では、松江市大庭町地内で計画されていた個人の宅地造成計画に対して、本地域が『松江市遺跡地図』（1992年2月刊行）に記載されている「出雲国造館跡」に該当するため、事前の遺構確認とその保存状況を確かめるための発掘調査が必要であると判断し、平成四年度に総額1,000,000円の国庫補助事業として実施することになった。

調査地は造成計画地内の3か所で、その地番は松江市大庭町字土居299-3・295-2・295-10である。調査面積は3か所で合計約100m²であった。また調査期間は、平成4年10月12日から同年11月13日までである。

2. 位置と歴史的環境

「出雲国造館跡」は、松江市の南郊に広がる出雲地方有数の穀倉地帯である意宇平野の



第1図 調査地位置図

南西端にあって、標高約20mほどの低丘陵上に位置する。

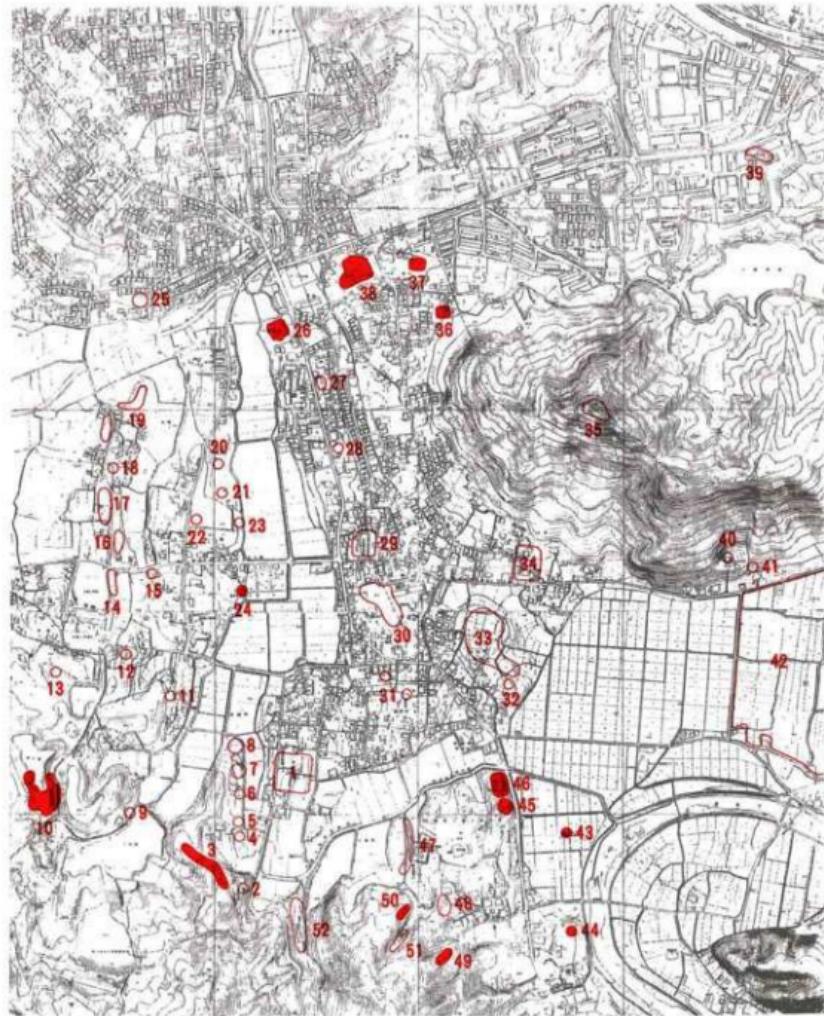
意宇平野には大庭鶴塚（方墳—42m）・山代二子塚（前方後円墳—90m）・山代方墳（前方後方墳—40m）、岩屋後古墳（墳形不明—石棺式石室）・岡田山1号墳（前方後方墳—24m）・岡田山2号墳（円墳—43m）等の大型古墳が点在して築造されている。出雲国造跡の南方の山稜には荒神谷・後谷古墳群（方墳16基、横穴群）や大石古墳群（方墳8基）等の群集墳も見られる。

この意宇平野を含む「意宇郡」を中心として出雲国全城に勢力を振るっていたのが、出雲国造を中心とする出雲氏であった。本来、出雲氏はこの地を本貫地として祭事を司り、郡司の要職をも独占していたが、延暦17年（西暦798年）国造大領兼帶の禁により、熊野・杵築両神社の祭事にのみ専念することになった。

徳治2年（西暦1307年）に出雲泰時の時、国造家の諸領が分与され、これが千家・北島両家の基となった。この後千家国造館は大庭町字向地区に、北島国造館は隣接する大庭町字元鳥居に明治初年まであったと伝えられ（注1=加藤義成「古代祭祀遺跡」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975年），明治初年に地元の高梨兵三郎氏が書き残した両国造館の鉛筆画も残っている。

第1表 周辺の遺跡一覧表

番	通路名	井	種	洞	内	谷	備考
1	出雲国造跡路	井	古	跡			
2	神魂神社本殿	井	古	跡		国宝	
3	大石古墳群	井	古	跡	方墳16基		
4	正林寺遺跡	井	散	布	地		
5		井	散	布	地		
6		井	散	布	地		
7		井	散	布	地		
8		井	散	布	地		
9	大石横穴群	井	横	穴	群		
10	荒神谷・後谷古墳群	古	跡	古	跡	方墳1基・横6穴以上	未指定
11	枕上家古墓群	古	跡	古	跡		
12		井	散	布	地		
13		古	跡	古	跡	前後方墳	
14	大庭小学校校庭道路	井	散	布	地	須恵器片	
15		井	散	布	地	須恵器片	
16		井	散	布	地	須恵器片	
17		井	散	布	地	須恵器片	
18		井	散	布	地	須恵器片	
19		井	散	布	地	須恵器片	
20		井	散	布	地	須恵器片	
21		井	散	布	地	須	土器・空塗
22		井	散	布	地	須	須恵器片
23		井	散	布	地	須	須恵器片
24	東瀬寺古墳	古	跡	古	跡	前方後方墳(4m以上)	
25	山田古墳群	古	跡	古	跡	方墳2基	
26	大庭鶴塚	古	跡	古	跡	方墳(42×42m)	国指定
27	大庭佐東道跡	井	散	布	地	散布地	
28	山代遺跡	井	散	布	地	須生式土器片	
29	出雲山山代御止首跡	井	散	布	地	吉備跡	国指定
30	鬼田跡跡	井	散	布	地	鹿跡	
31	鬼田蛭道跡	井	散	布	地	散布地	
32	山原古墳	吉	古	跡	古	墳	墳形不明
33	山原道跡	井	散	布	地		
34	西王寺跡	井	散	布	地	寺跡	
35	茶山山城跡	井	横	穴	群		
36	永久宅後古墳	古	跡	古	跡	方墳(45×45m)	
37	山代方墳	吉	古	跡	古	墳	国指定
38	山代二子塚	吉	古	跡	古	墳	前方後方墳(41m)
39	十士免横六群	井	横	穴	群	27穴墓葬	国指定
40	真名井神社本殿	神	古	跡	古	跡	須指定
41	大石横穴群	井	横	穴	群	2穴	
42	出雲御府跡	井	散	布	地		
43	岩屋後古墳	吉	古	跡	古	墳	墳形不明
44	御坂山古墳	吉	古	跡	古	墳	前方後方墳(41m)
45	岡田山1号墳	吉	古	跡	古	墳	前方後方墳(24m)
46	岡田山2号墳	吉	古	跡	古	墳	方墳(43m)
47	有道跡	散	布	地	須	須恵器片(住居跡)	
48	有道遺跡	散	布	地	須	須恵器片	
49	寺山古墳群	吉	古	跡	古	墳	(10×10m)2基
50	古墳群	古	跡	古	跡	方墳(15×15m)3基	
51	有道横穴群	井	横	穴	群	5穴以上	
52	南田道跡	井	散	布	地	須恵器・土師器片	



第2図 遺跡分布図

3. 発掘調査の概要

「出雲国造館跡」周辺では、今回の調査も含めて過去4回にわたり島根県教育委員会と松江市教育委員会で実施されている。

(1) 昭和54年度の調査（松江市教育委員会）

出雲国造館跡西側の水田が、大庭東部地区は場整備事業として整備されるのに伴い、事前に発掘調査を実施したものである。

柱穴や井戸跡、土壙などの遺構が検出され、それに伴って大量の土器類が発見された。出土した須恵器・土師器の年代は、古墳時代前期末頃から平安時代末期までで、陶磁器や国産陶器の一部は中世鎌倉期まで続いていることが認められる。特に南宋から輸入された青磁・白磁片が大量に出土したことから、近在に強大な実権を持つ豪族の居館があったと推定しているほか、中世以後の遺物が極端に少なくなることから、生活規模が急激に縮小したものと考えられている。（注2＝松江市教育委員会「出雲国造館跡発掘調査報告」1980年）

(2) 昭和55年度の調査（島根県教育委員会）

大庭町字薬師ノ前・字元鳥居・字長畑・字仁平屋敷の国造館跡推定地周辺5か所で発掘調査を行い、掘立柱建物群8、井戸状遺構1、鍵形の落ち込み1を検出している。

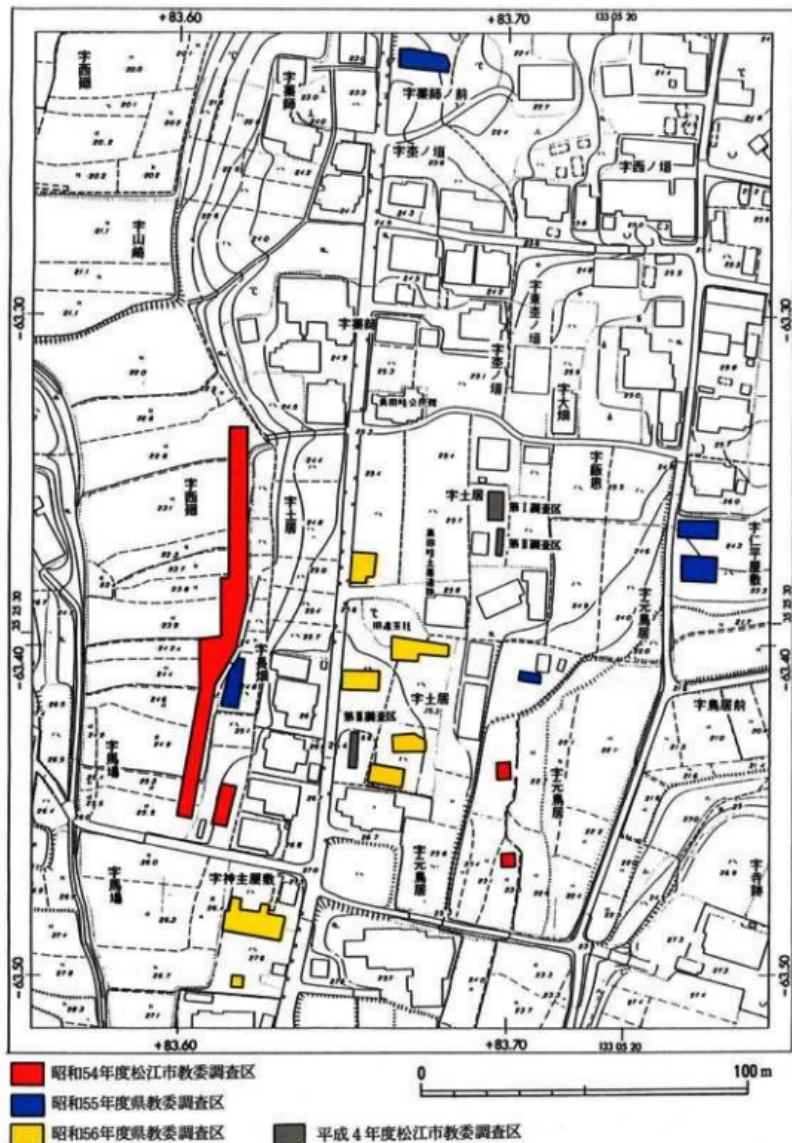
第5調査区では、包含された遺物の観察から、奈良時代に大がかりな埋め戻し作業を行った跡が認められ、更に中世に削平されて新たな建物が建てられたものと判断されている。

（注3＝島根県教育委員会「団原遺跡発掘調査概報7」1981年）

(3) 昭和56年度の調査（島根県教育委員会）

大庭町字土居・字神主屋敷の7か所で発掘調査を実施したもの。土居第6調査区を除く各調査区において多數の柱穴状の落ち込みを確認し、竪穴式住居1棟、掘立柱建物跡7棟、櫛列1、溝1、土壙4を検出している。

神主屋敷第5調査区の溝（SD-01）は、上幅2m、下幅0.8m、深さ1mを測る、断面逆台形の遺構である。溝内から出土した陶磁器類と寛永通宝片から近世に埋没したものと考えている。（注4＝島根県教育委員会「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告5」1982年）



第3図 調査位置図

(4) 平成4年度の調査

第I調査区 第I調査区は東西約10m、南北約24mの畑地であるが、家屋や立木があり、調査を実施したのはこの内約60m²である。

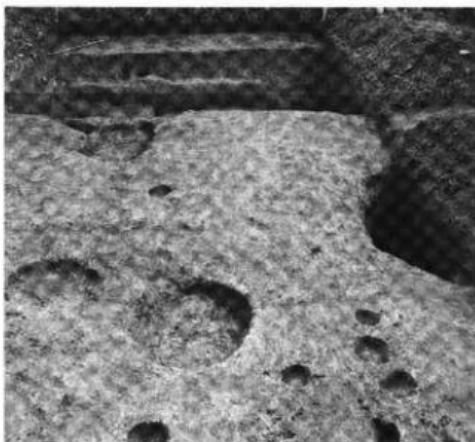
第I調査区は調査地全域が15cmほどの耕作土で覆われており、その下面すぐに地山に当たる。地山面には大小さまざまな柱穴状のピットが認

められるが、一部を除いて大部分は畠地耕作における後世の攪乱と考えられる。国造跡に関連すると思われる遺構は、調査地南側で検出された幅2m、深さ0.8mで断面逆台形の東西に走る大溝（SD-01）と、北西側に掘られた上端幅1.5mの円形の土壙（SX-01）である。

東西に走る大溝（SD-01）は、上端の広い地点で2.6m、狭い地点で2.4mあるが、深さは一定しており底部もほぼ平坦である。埋土は固く締まっていたが、その埋土中には多量の土師器片が検出され調査期間の多くがこの大溝に費やされた。



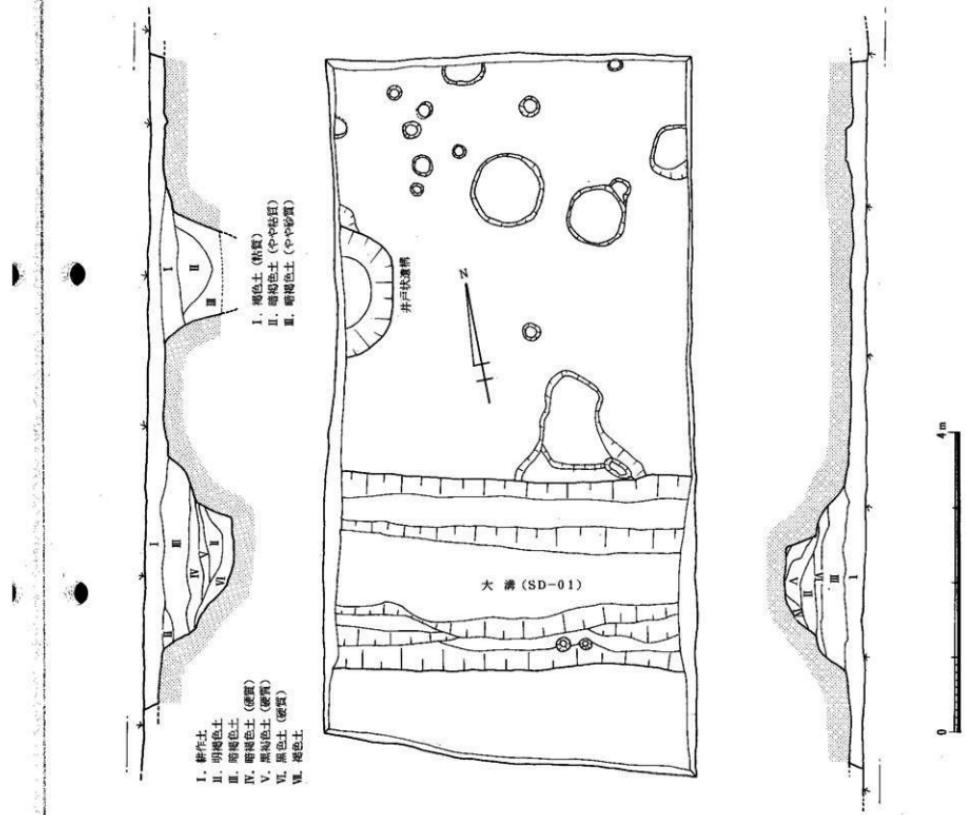
第I調査の現況



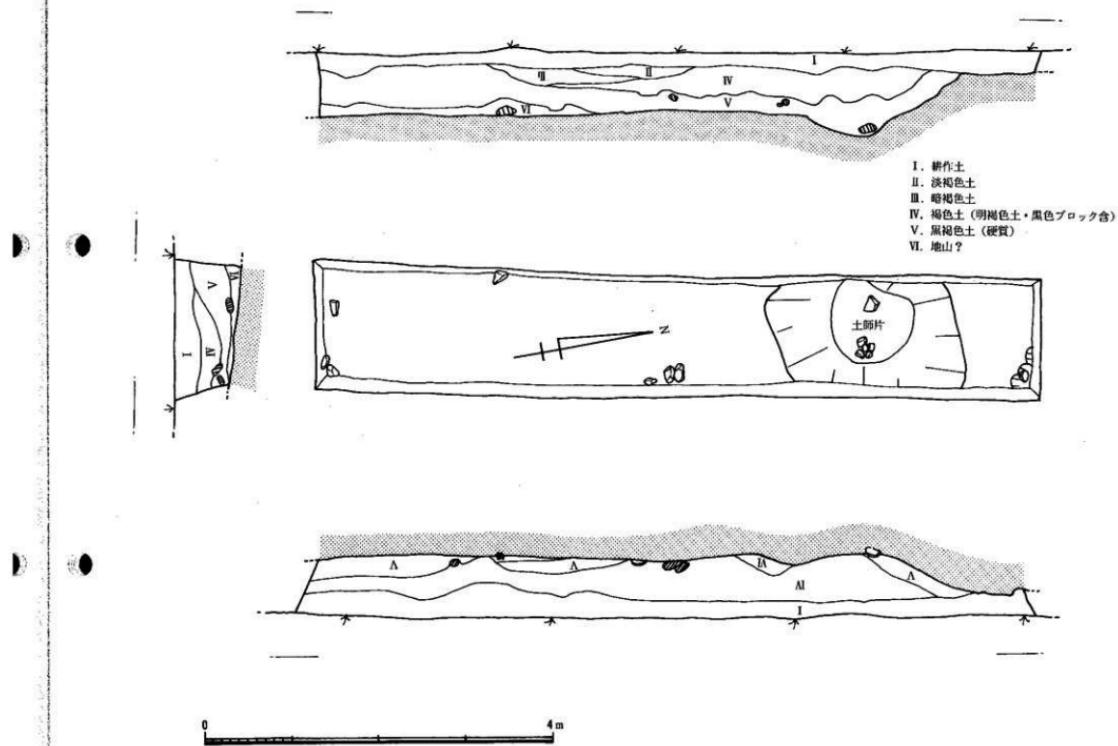
調査終了後の第I調査区

こうした埋土状況は自然堆積によって出来たものとは考え難く、埋土中や溝底の遺物から考えると、埋め戻された時期はおおよそ平安時代～中世に行われたものと推測する。

北西の平面円形の土壙（SX-01）は、今回調査地に半分ほど検出されたものである。遺物は少ないが、底部に近づくに従って多くの傾向がある。本土壙は、逆円錐状に急速に狭くなっている為にその



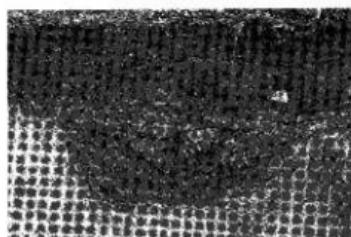
第4図 第1調査区成果図



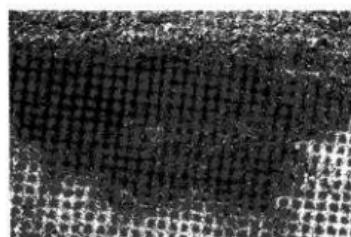
第5図 第II調査区成果図



大溝 (SD-01) の状況



同上東側土層断面



同上西側土層断面

底部を確認することが出来なかったが、平面形や遺物の出土状況から考えると、井戸の形状を成すものである。

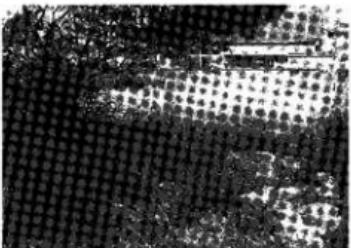
全体的な遺物の出土状況を見ると、調査地全域、全層位から土師器片と須恵器片が検出されるが、特に大溝に集中しており土師器片が80%程度を占めている。

第Ⅱ調査区 第Ⅱ調査区は、第Ⅰ調査区の南東に接する幅2m、長さ9mのトレンチである。第Ⅰ調査区から続く地山面が第Ⅱ調査区の北端で検出されるが、南に向かってすぐに急傾斜で落ち込み高さ50cmの段を作る。そのまま南に向かって平坦面を成して続いている。平坦面は表土下80cm前後である。

遺物は第Ⅰ調査区と同様に全域にわたって土師器・須恵器の細片が検出されるが、大溝内 (SD-01) の遺物の量と比べると少ない。調査区南側の地山面で、完形品に近い土師質の碗または器高の低い「かわらけ」様の土器が検出されている。

第Ⅲ調査区 第Ⅲ調査区は大溝の検出された第Ⅰ調査区から南に、50mほど離れた地点で、昭和56年度に島根県教育委員会が行った黒田莊土居Ⅰ調査区・第8調査区の西に隣接する畑地である。

本調査区は耕作土を約15cm除去すると、明褐色の地山面に達した。遺物は第Ⅰ・第Ⅱ調査区と同様に全域にわたって土師器・須恵器の細片が認められる。



第2調査区の現況



同上調査終了（北から）

遺構は調査区の南側で北西から南東方向に走る竪穴住居状の掘り込みが検出された。この掘り込みの埋土は黒褐色を呈し硬く締まった火山灰土で、層中から竪穴・土師器壺片・土製支脚片が検出された。この埋土を取り除くと、柱穴状のピットが多数と、焼土塊が一か所で検出された。

こうしたことから、本遺構は一辺3.3mの隅丸方形の竪穴式住居跡と考えられる。床面上の遺物は発見されなかったので、その造られた時期は確定できないが、黒褐色埋土中の遺物に器台の小破片も見られることから、弥生時代末～古墳時代初頭に造られたものではないかと推定される。

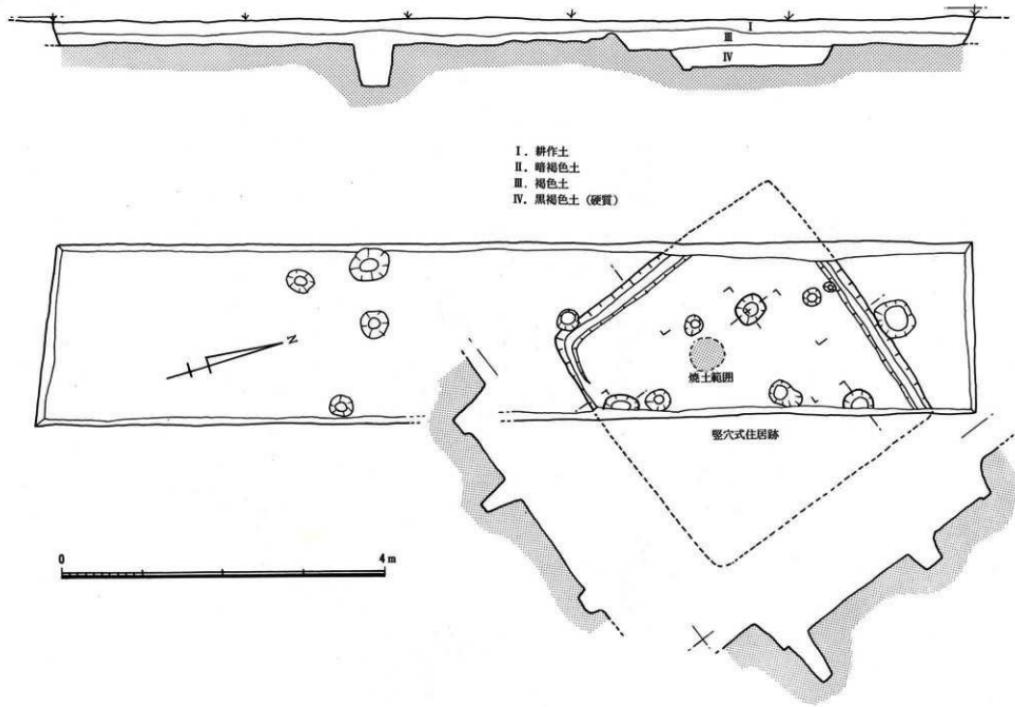
他の場所でも数個のピットが検出されたが、そのうちの一つには土師器の細片がぎっしりと詰まっていた。このピットは表土から掘り込まれていたので、後世の畠地耕作の際に造られたものであろう。

4. 出土遺物の概要

出土遺物は全体の80%を土師器片が占めている。その多くは平底の回転糸切り痕を持つ碗および「かわらけ」様の器高の低い土器である。須恵器は大型の壺片等は無く、すべて小型の杯及び碗形のものであった。

1-1は第I調査区の大溝の底部から出土した土師質の碗である。直線的な底部からやや外反しつつ立ち上がり、口縁部ではほぼ垂直となる。口径11.6cm、器高5.4cm。底外面に回転糸切り痕を有する。

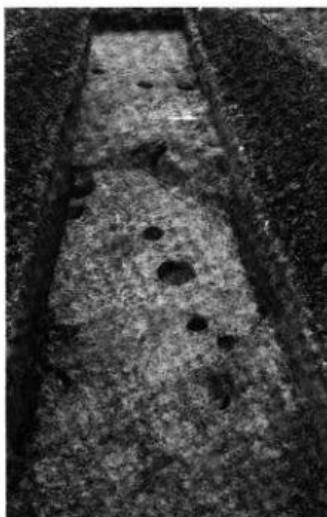
1-2は1-1と同じ地点で出土した土師質の小皿で口径8.0cm、器高1.4cmある。底部外面に回転糸切り痕が認められる。形状的に「かわらけ」様のものである。



第6図 第Ⅲ調査区成果図



第3調査区近景



同上調査終了（北からみる）

1-3は土製支脚の一部である。第I調査区大溝の黒褐色の堆積土中から出土。土製支脚に関するものでは、この他に受けの部分や支脚の足部分の破片も検出されるので、複数あった可能性もある。

2-1・2-2・2-3・2-4はいずれも第II調査区の底部から出土したものである。

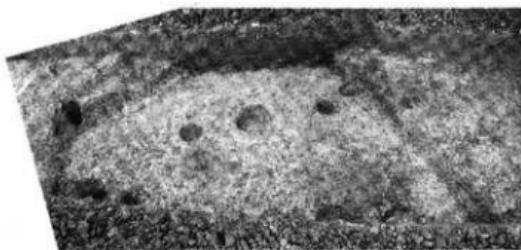
2-1は口径10.2cm、器高4.6cmあり、底外面に回転糸切り痕が残る。

2-2は口径11.8cm、器高3.4cm、2-3は口径11.0cm、器高3.1cmを計り、いずれも底外面に回転糸切り痕がある。1-1に比べると底部の作りは簡素で、口縁部もより単純となる。

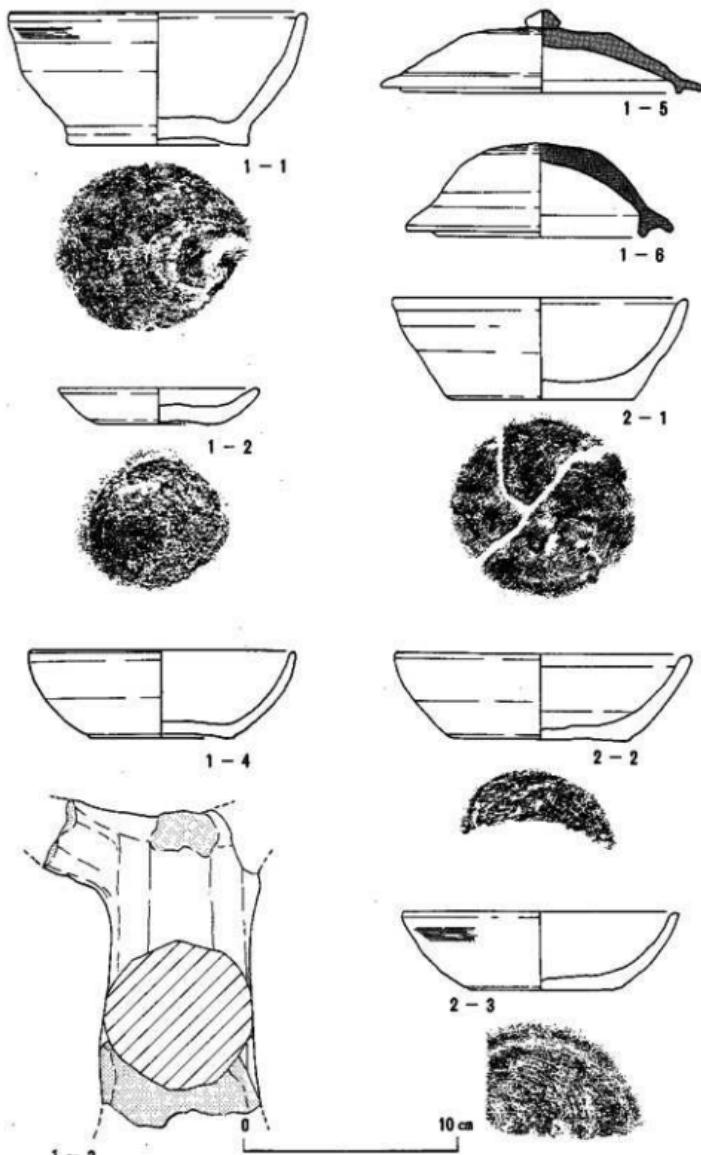
1-1・1-2・2-1・2-2・2-3はすべての調査区で普遍的に見られるもので、数量的にこれららの器種が大部分を占めている。

3-1は第Ⅲ調査区から出土した唐津系の小皿で、口径8.6cm、器高1.6cmを計る。口縁部に黒色の焼け痕が見られるので、灯明皿に使用したものであろう。

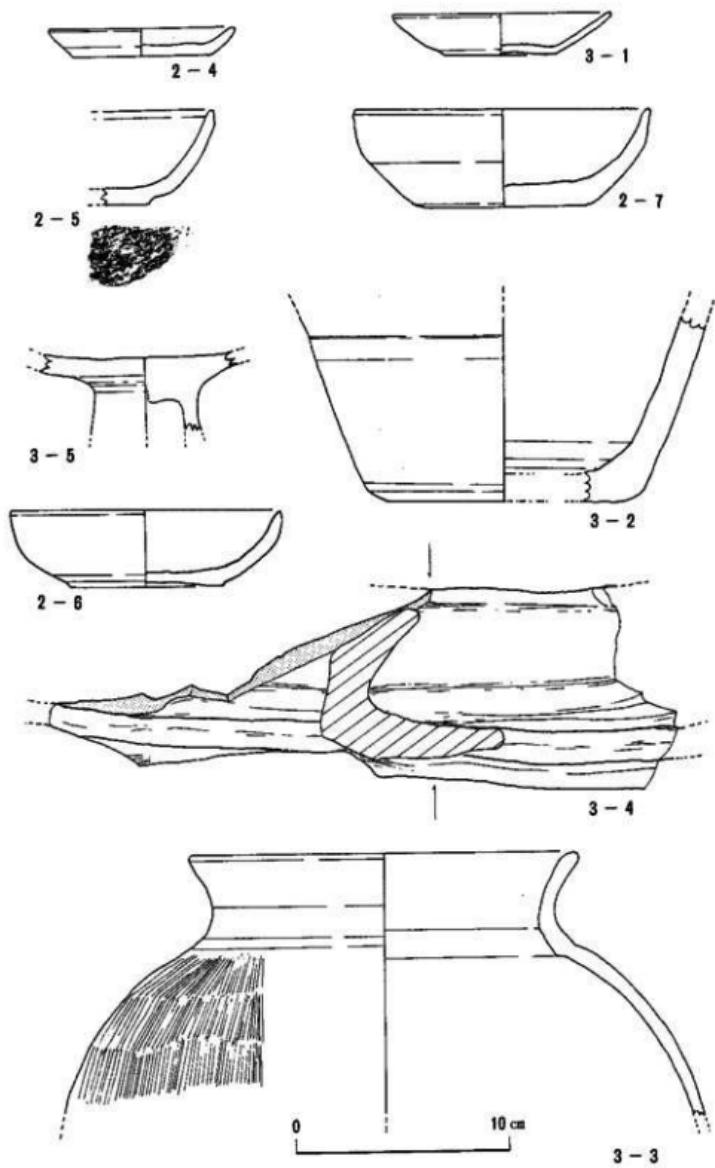
3-2は須恵質の壺の底部片と思われるが、焼成と土器底部の形状から中世頃に焼かれたものと考えられる。



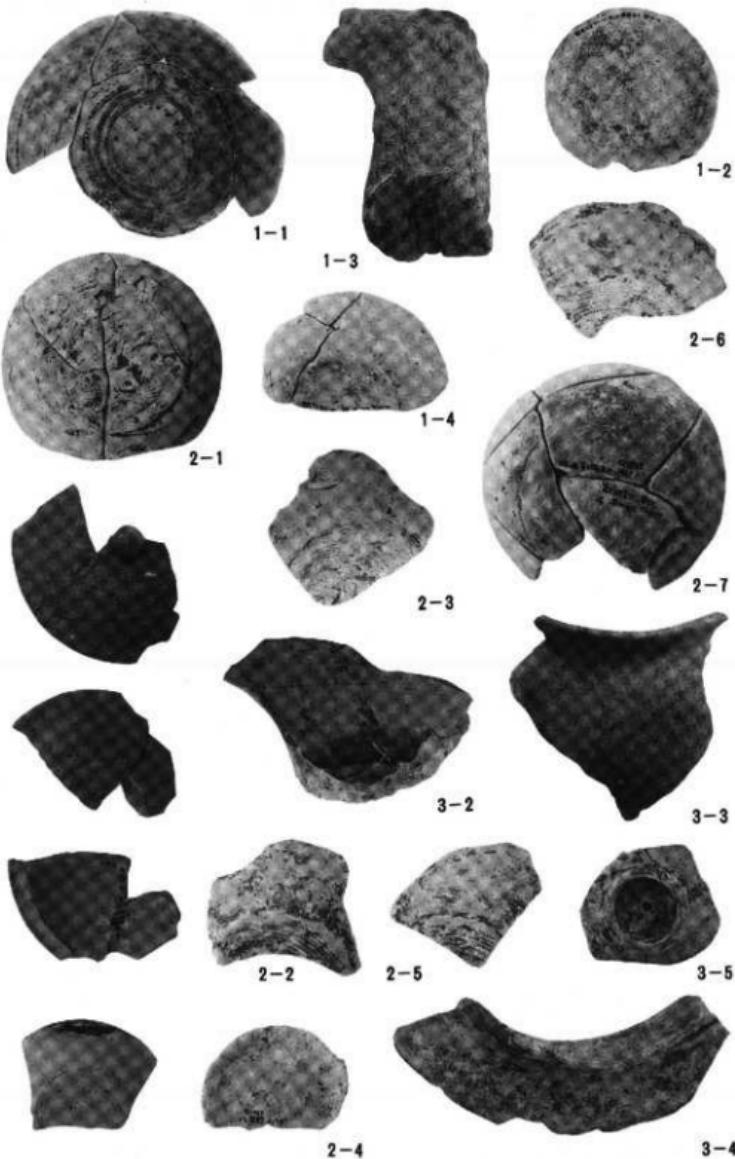
竪穴式住居跡（東から）



第7図 遺物実測図 (1)



第8図 遺物実測図 (2)



第9図 遺物写真

3-3と3-4は第Ⅱ調査区の竪穴住居跡の直上の黒褐色土層中から出土したものである。竪(3-4)と同時に使用したと見られる土師器壺(3-3)の口縁片である。土師器の口縁部の形状から見るに、この2つは古墳時代に作られたものであろう。

器台の破片ではないかと思われる二重の段を有する土器片も、第Ⅲ調査区の黒褐色土中から出土している。

5. 小 結

出雲国造館跡周辺の発掘調査は、前述のとおり昭和54年度から平成4年までの間に4度実施されている。このうち今回行った調査では、第Ⅰ調査区で検出された大溝が注目されるであろう。

こうした大溝は通有の廐水施設としての目的の他に、重要な建物を区画したり外敵から防御したりするために設けるものと考えられている。国造館跡近在には、古代には「山代郷正倉跡」があり(注5=島根県教育委員会「史跡出雲山代郷正倉跡」1981年)、中世には豪族の館跡と考えられている「黒田館跡」も隣接して所在するが(注6=松江市教育委員会「黒田館跡」1984年)、発掘調査の結果はいずれもこうした溝によって区画されていたことが判っている。

こうしたことから本件調査で検出された大溝に着目し、以前に行われた周辺の調査でも検出されているのではないかと考えたところ、昭和56年度に島根県教育委員会が行った調査区の一つである大庭町字神主屋敷の第Ⅰ調査区を北に拡張した際に、同様の大溝が検出されていることが報告されていた。この溝の形状と規模は、今回検出した大溝と極めて酷似しており、



第10図 国造館推定地

この二つの溝は同様の目的をもって造られたものではないかと推測するのである。

これら二つの地点で検出された大溝はいずれも東西に走っており、その南北間の距離は約112mで、1町（60間=約109m）に近い。山代郷正倉跡が約2町四方と推定されていることから（注6=松江市教育委員会「下黒田遺跡」1988年），その支配者たる出雲氏の館が1町四方あったとするのは妥当であろう。

過去の調査では、この2か所以外では大溝が検出されていないので南北方向の位置が確定できないが、1町四方の建物を検出された二つの大溝を基準にしてみると、土居という小字を含む地域を中心としたおおよその位置を推測することができる。この推定位置は旧山道が山代村と大庭村から回り込んで合流している地点であることからも伺うことができる。（注1参照）

神魂神社はもともと国造家の邸内社ではなかったかと古文書学的にも言われている（注7=熊野英助「建造物『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』1975年）。神魂神社という名前は「出雲國風土記」や「延喜式」には見えず、その名が見えるのは中世に入ってからである。この時期は国造家が分立し、その祭事の多くが杵築大社へ移っていった時期もあり、元々邸内社であった神魂神社がこうしたことによって次第に神社として独立し、形態を備えていったのではないかと推測されている所以である。

本調査の結果により推定した出雲国造館は意宇平野の南端に位置するが、この地からさらに南に入った山裾の所謂奥ノ院的な位置にこの神魂神社があり、地理的にも出雲氏の個人的な氏神の様相を強く持つのである。

大溝が丁寧に埋め戻されているという事実は、中世出雲国造館の敷地を更に拡張するためであったか、或いは北島国造館の新設に伴うものではないかとも考えられる。また、堅穴式住居跡は昭和56年度に島根県教育委員会が調査した黒田畦第Ⅲ調査区で円形の堅穴式住居跡が検出されていることから、弥生時代からこの台地上に集落があったことが知られる。

今回の調査は、徳治2年（1307年）に分与されたことを発端として千家・北島両家に分立した出雲国造家の元々の国造館はどこにあったかということが目的であり、極めて大きな効果があったと思われる。今後の調査では、南北にも大溝があるかどうか、今回検出した大溝の外側にも溝があるかどうか、更には弥生時代の大規模な集落跡が推定されるなど、計画的に調査を行う必要があると考える。

出雲国造館跡発掘調査報告書
報 告 書

1993年3月

発 行 松江市教育委員会

印 刷 有限会社 谷 口 印 刷
松江市母衣町89